2023年　8月　JBBF国内宣教委員会　機関紙　第89号

かいたく

教会のない地域に教会を　刈り入れ場に働き人を

詩篇一三八～一四五篇にダビデの詩篇が歌われています。苦難の連続のダビデにとって神の助けは常に必要で、「神への嘆願数ランキング」があるとしたら一位でしょう。敵に対する主の御手のわざの続行を願い（一三八：七・八）、神から離れた同胞に対する怒りを神にぶつけ（一三九：一九～二二）、悪者の手からの保護を願い（一四〇：四）、自分が罪を犯さないようにと願い（一四一：三～四）、弱く打ちひしがれた思いを神に注ぎ出し（一四二：一～二）と、尽きることがありません。ところが、一四五篇には一つの嘆願もなく、神の王国（御国）の支配と祝福とが最大級に表現されています。私たちは信仰者として地上で何をしているのでしょう？まだ見ぬ神の王国のために働いているのです。苦難の地上に焦点に合わすなら、すぐに先ほどのランキング上位に入るでしょう。神に嘆願してはいけないのではありません。地上にいても王国を望み見る生き方のほうが、王国の民としてふさわしいと言っているのです。そうなれば、神である王をあがめ、告白する言葉が増えて来ます。ダビデも試されながら王国の思想が自分自身のうちに培われていったのではないでしょうか。教会も個人も、神様にお願いしたいことは尽きることがないでしょう。しかしそちら側ではなく、「私の神。王よ：」（一四五：一）、「…主の王国の輝かしい栄光を知らせます」（同：一二）、「あなたの王国は、永遠にわたる王国：」（同：一三）と王国の完成に向かった告白でランキング上位をねらいたいものです。

JBBF国内宣教委員会委員長・井口拓志

かいたく　2023年8月発行　第89号　発行元JBBF国内宣教委員会　長野県北佐久郡軽井沢町大字追分4696-27　編集責任者井口 拓志　デザイン疋田 健次

２０２３年９月２２日（金）・２３日（土）

国内宣教カンファレンス 2023

この福音のために

～福音のために心を一つにしてともに戦おう～

講師:浜田 献先生（清水聖書バプテスト教会）

昨年のカンファレンスの様子

「…あなたがたは霊を一つにして堅く立ち、福音の信仰のために心を一つにして共に戦っていて…」　　ピリピ人への手紙 一章二七節

昨年に続き、「福音宣教を志す方々との霊的交わり」を目的とした国内宣教カンファレンスを開催いたします。このカンファレンスの特徴は教会の兄弟姉妹たちにも積極的に参加していただき、伝道者の先生方との交わりを持つところにあります。

コロナも一つの要因となっていると思われますが、福音宣教に閉塞感があることは誰もが認めるところかと思われます。だからこそ、この機会を活かして自らの信仰を見直し、更には霊を一つにして堅く立ち、福音の信仰のために心を一つにして共に戦いたいのです。兄弟姉妹においては献身を祈り、宣教に重荷を持っておられる方々もおられると思います。どうぞご参加ください。「主のために」という思いがありながらも、まだ具体的でない方々もどうぞご参加ください。先生方、どうぞご参加ください。

尚、ライブ配信は行いません（後日録画したものを配信する予定です）。貴教会を通して主イエス･キリストの素晴らしさが益々あらわされるようにお祈りいたします。　（JBBF国内宣教委員会）

献金振込先（郵便振込）
００１４０・２・６５４３７５
ＪＢＢＦ国内宣教委員会

会　場： 日本バプテスト聖書神学校チャペル
参加費： 大人2,000円（18才以上）　※高校生以下は無料です
宿　泊： 神学校、グレースキャンプ場、周辺ホテル　※宿泊費･食費は別途
補　助： ①宿泊費補助　ホテル利用者に3,000円補助
②交通費補助　申告された方に上限15,000円
申　込： 宣教委員（中川）までメールいただくか、次のアドレスからお申し込みください。　https://forms.gle/8DNBLEXusxFKeGd48
締　切： 9月11日(月)　　中川メール　katsumibaptist@ashikagabbc.org

伝道者の介護問題について（1）

港北ニュータウン聖書バプテスト教会 協力牧師
NPO五つのパン、ヘルパーステーションサーピス提供責任者　鹿毛 独歩

最近、伝道者の先生方が親御さんの介護のため、その働きを断念せざる得なくなるケースがあるということで、今回の原稿の依頼がありました。私たちが伝道者になる時、家族親族の関係を全て捨てて、献身の道を歩き始めました。しかし、時が経ていく中で、親も年をとり、自らも年をとり、介護という現実にぶつかってきています。どう考え、どう関わったら良いのでしょうか。二つの介護への視点と取り組みが、伝道を継続していく者にとって必要ではないかと思います。一つは、伝道者の親の介護。二つ目には、伝道者自身の高齢化による介護です。今回は伝道者の親の介護について考えてみましょう。

私たちが開拓伝道を始めた時、親はまだ50代、何かと孫たちのためにと生活の支援をしてくれました。しかし、伝道も30年を超えてくると、当然親は80代となり、父は数年前に87歳で天に召され、母は今年90歳になりました。

①少子化による親への責任

現代の大きな問題となることは、少子化です。兄弟が多くいた時代、献身者たちは家よりも教会との関わりが深く、家にとっては期待できない者として、他の兄弟たちが家や親を看るということになっていました。弟や妹が親を介護し、家や先祖の墓の管理をするというような具合にです。しかし、少子化の時代となり、伝道者夫妻がひとりっ子の長男長女であれば、それぞれ4人の親たちの介護を考えなければならないのです。また、たとえ2人兄弟であっても、クリスチャンでない兄弟と親との折り合いが悪いといつも優しくしてくれるクリスチャン家庭の方に親は期待することになるでしょう。逃れることができない介護の現実を見ることになるのです。

②伝道者の経済的困難

伝道者の家計は決して豊かなものではありません。子どもたちの生活費、教育費、教会の働きのための経費。独立した教会であっても、有り余る謝儀が与えられることはありません。開拓からの教会であれば、いつも赤字、伝道者夫婦がアルバイトをしながら何とか生活を支え、教会を支えています。開拓期の教会は母教会の支援、他教会の支援がありますから何とか大丈夫でも、教会が独立した時から一切の支援がなくなり、開拓期よりも厳しい経済状態で、伝道よりも生活優先でのアルバイトをしながらの働きとなります。少し教会が大きくなって経済的に安定しても、次の牧師招聘、引退後の伝道者の生活、それに親の介護という大きな課題を抱えることになります。それゆえ伝道を断念せざるを得ない状況が生まれてくるのです。

③介護の道

親の介護であっても、必要な社会的支援を受けることができます。親が介護を必要とするようになる前に、よく話し合っておく必要があります。親の介護にあたってどのような選択ができるのでしょうか。ご両親が健在ならば問題ありませんが、親のどちらかが亡くなり、さらに一人暮らしができない状況になった時、いくつかの選択肢があります。一つ目は、訪問診療、訪問看護（自宅に医師や看護師が来てくれる）、訪問介護ヘルパーを入れての一人暮らし。二つ目は、伝道者家族が同居をしての在宅での介護。三つ目は、同居しながら介護ヘルパーを入れて支援を受けながらの在宅介護。四つ目は施設入所があります。そこには親の希望と子どもたちの気持ちとのすり合わせが必要となります。それが決まり次第、準備を進めていくことです。親の介護は、家族だけの頑張りで継続していくことはできません。家族全体が疲弊していくような選択をしてはいけないのです。なぜなら、介護はいつまで続くか分からない道のりだからです。役所で相談をし、受けることができる公的援助、人的支援、利用できるサービスを調べてみてください。また役所のケースワーカー、地域のケアプラザ等のソーシャルワーカーに相談をし、ケアマネさんと共に、介護のあり方を考えていく必要があります。たとえ一人暮らしでも、週の数日はデイサービスに通い、訪問看護師による健康管理や訪問介護ヘルパーによる生活の支援も考えられます。施設入所も、あるところは100人待ちとさえ言われるように、多くの人々が入所を待っておられます。施設入所も健康管理、食事管理、睡眠管理の面では、致し方の無い選択の一つであろうと考えます。さまざまな介護の過程の中で出会う方々との関わりにおいて、支援してもらうだけではなく、そこでしかお会いできない魂との出会いというものも神様は備えておられるのです。伝道者としての働きを継続していくためにも、多くの祈りとさまざまな支援を求めていきましょう。伝道者の働きは自分自身の働きではなく、神の御国のための働きだからです。

連載④

イエス・キリストの恩寵の中で

主なる神は生きておられることを知る

名古屋聖書バプテスト教会国内宣教師　上田　晃

私が京都に戻った理由は、義理の従弟の誘いがあったからです。京都駅に従弟夫婦がタクシーで迎えに来てくれました。「豪勢やなあ」と思いましたが、不安な思いがよぎりました。到着した従弟の家は、狭い二部屋があるだけの家だったからです。従弟は歓迎会だと言って、夕食の用意をしてくれてはいたのですが、「よく来てくれた」と言いながら、酒を飲むのです。しばらく、この家で過ごしましたが、酔っ払った従弟が怒号を上げ、夫人に暴力を振るうのを何度も見ました。従弟は夜になると豹変するのです。地獄のような雰囲気の家にいたたまれなくなった私は、最初の義母の兄である叔父を訪ね、事情を打ち明けました。私の到着より早くに送金した学資金や預金、現金、父の大切な形見の着物、靴、冬布団などを含め、従弟はそれらすべてを酒代と遊興のために使ってしまっていたのです。気づいたときには手遅れになっていました。叔父は「今すぐ、その家を出なさい」と言いました。

それから私は叔父の旧知の方の家に連れていかれました。住所は京都市東大路通知恩院上る（あがる）です。市電が通る大通りに面した、京風の二階連屋建ての家で、南角から二軒目の家でした。二階の一部屋が京都における私の住まいとなったのです。叔父も家主の方も、とても親切で、暖かく迎えてくださいました。その時に受けた御恩は今でも忘れることはありません。友人もできました。日曜日は知り合いと東山に登り、不安を紛らわすために山頂にある草木を見つめながら俳句を詠みかわしました。しかし、従弟がしたことを思い出す度、私は不安な気持ちになりました。これまでのことは諦めるとしても、今の状態では長年の夢も閉ざされてしまう。絶望は増すばかりです。当時、占いに凝っていた私は悩みを打ち明けたある占い師に洗脳され、改名を考えておりました。

京都市電:知恩院前
（右側に見えるのが当時の住居）

そうした春の夕刻、祇園浦の円山公園を散歩していますと、荘厳な歌声が聞こえてきたのです。歌声のする方角に引きつけられるようになって行きました。「復活前夜祭」と書いた大きな横断幕が入口に掲げられていました。中は大勢の人でいっぱいです。いただいた紙は二つ折で、十字架と道路と火が燃えている場所に落ちていく人、十字架の門から入っていく人、上の方には天国らしき建物がうっすらと描かれていました。私はそれを見るともなく読むともなく、ポケットに入れていました。こうして私は教会に通うようになったのです。

円山公園と集会が行われていた
公園音楽堂の現在の様子

しばらく経って、天狗の正体を明かした母から一通の封書が届きました。内容は「教会に行くことに反対。行くようならば親子の縁を切る。本家の兄も同じ考え。親族にも耶蘇（やそ＝イエス）の者はいない。先祖からの宗教を継ぐように」とありました。母は私が教会に行っていることを喜んでくれると思っていたので意外でした。以来私は五年ほど一方通行の手紙を母に送り続け、主の福音を証しし、母の救いを祈りながら、暮らしの様子を知らせていました。それは、親は子を見捨てても、子は親を見放さないという主なる神の御心ではないと信じたからです。

私が能登に住んでいた間、母と年の離れた実妹（日赤看護士）が病気で生家に戻り、転地療養をしていました。叔母は私に暖かく接してくれました。私が学校から帰ると、勉強の大切さ、勉強が楽しくなる秘訣を教えてくれました。その後、何年間か生家で療養しておられましたが、治療のため、加賀の片山津温泉地域の病院に入院しました。私は救われたばかりでしたが、その叔母にこの喜びを伝えたくて、福音と救われた喜びの証しを手紙に書いて投函しました。すると、すぐに叔母から返信が来ました。美しい筆跡でヨハネ福音書三章十六節の聖句が記されていました。叔母はすでにクリスチャンになっていたのです。叔母の手紙には感謝と喜びの言葉が溢れていました。

「ハレルヤ、おめでとう。お姉ちゃんもクリスチャンになりました。お姉ちゃんはアキラさんがイエス様を信じて、救われるようにと毎日祈ってきました。私はイエス様のみもとに間もなく召されますが、あなたはしっかり信仰を守り、イエス様のために働いてください。あなたのために天の御国で祈っていきます」と書いてありました。私の救いのために祈ってくださっていた人が母の実妹だとは思いもしませんでした。

この時、神様はとりなしの祈りにお答えくださることを強く知ったのでした。聖霊なる神が私たちの霊とともにおられて、とりなしてくださるからです。キリストに反対している姉のことを知っていたはずの叔母がクリスチャンになっていたことは、だれも知る由はなく、主のみが知り給うことであります。その時、私はまだ、バプテスマを受けていない時期でしたが、叔母の谷愛知姉は間もなく天に召され、教会で葬儀が行われました。奥能登から親族全員が片山津キリスト教会で挙行された葬儀に列席したのでした。以来、叔父はキリストに反対しなくなったばかりでなく、福音を聞きたい雰囲気を醸し出してくれるようになりました。私は神のおとりはからいと摂理、ご聖霊のお働きがあることを知りました。聖書の神は生きておられ、信じる者の祈りや伝道の働きを支えておられることに目を見張るばかりです。

教会に行くようになってしばらく経った11月、私は自分の高ぶりと犯した罪と不信仰を神に対して悔い改め、イエス・キリストを自分の救い主と信じ受け入れる信仰告白をしました。すべてが新しくされたこと、新生したことが、鮮やかに理解できました。罪の重荷が取り除かれたのです。信じ救われた人は、愛する者や知人、友人がイエス様の福音を受け入れて、罪を悔い改め、救われるように祈っておられることを知り、自分もそうする決心をしました。

最初に通っていた教会
（平安京の入口、羅城門近く）

ある夜のことです。「**狐には穴在り空の鳥にはねぐらあり、されど人の子には、枕をする所なし。されど汝は我に従え。手を鋤に付けて、後を振り向くものは、神の国にふさわしからず。一粒の麦、地に落ちて死なずば、ただ一粒のみ。もし死ねば、多くの実を結ぶべし。恐れるな、我なり**」。次々とみ言葉が語られるように与えられ、聖霊のお働きがあることと、み言葉を伝える召命をいただいたことを確信し、献身することを決心し、「主よ、このような者ですが献身します。主よ、清め分かって用いてください」と涙ながらに祈りました。しばらくして、牧師先生が来られて、「兄弟、将来何になりたいかね。職業に貴賤はないが苦手な職業は何かね？」と問われました。私は献身したことを牧師先生に告白しておりました。「君、しばらく下積みを経験したまえ。ついて来なさい」。牧師先生の自転車の後ろに乗せてもらい、着いたところが何と、私が苦手と言った場所でした。「今日から、うどん屋の出前持ちをしなさい。日曜日には教会の礼拝に出席することを話しているから」と一方的に決められていました。献身の一歩と思い、受諾しましたが、その仕事だけは避けたいと思っていたので、「何で、どうして」と自問自答しておりました。毎日みじめな思いで一杯になっていました。そんな私にとって、主の日の礼拝は格好の逃れ場でした。

数か月が過ぎたある朝、聖霊のお働きがあることを感じました。「ああ、私はイエス様によって神の子となったんだ。自分を捨てていなかった。主よ私には虚栄心がありました。悔い改めます」。不思議なことに、その日を境に仕事が楽しくなったのです。嬉しくなったのです。知らないうちに賛美を歌っておりました。お得意さんから、店の屋号ではなく「アーメン屋さん」と呼ばれて注文をいただいておりました。料理の手ほどきも受けるようになりました。包丁の研ぎ方、鱧（ハモ）の骨切り、失敗を繰り返しながら、少しずつ仕事を任されるようになりました。ねぎの細切りは得意中の得意になっていました。ごぼう、ニンジンのささがき、サバ寿司用のサバの骨抜き、油揚げ寿司は100パーセント任されました。出前、鉢戻しは、片手ハンドルでできるようになったのです。（今では交通違反になりますが）。一番苦手な仕事が一番誇れる仕事に変えられていたのです。充実した日々でした。賛美と祈りが内側から溢れ出ていました。まさに地上天国のような生活でした。

主は小さき者を顧みてくださいました。仕事ができるようになってから試練もありました。日曜日、教会に行くことに経営者が反対するようになったのです。それでも、教会の礼拝は欠かさず守りました。教会で恵まれて、職場に戻りました。地獄のような迫害が待ち受けていました。しかし、主はいつもみ言葉をもって支えてくださいました。「**人、我が名のために様々の悪しきことをいうときは、汝ら幸いなり。喜び、喜べ、先の預言者たちも、かくせられたり、汝らの天の報いは大きい**」「**人若きときに首跨を負うよし、主これを負わせ給うなれば、独り座して黙すべし。口を塵につけよ、あるいは望みあらん**」み言葉が支えでした。

（次号に続く）

シリーズ

～コロナ禍における伝道④～

新たな働きと新しい出会い

すずらん聖書バプテスト教会　牧師　トニーエバンズ

すずらん聖書バプテスト教会の新会堂
（2019年8月～）

2019年8月、私たちすずらん聖書バプテスト教会は主の恵みと摂理により、3年以上祈り献げた「新会堂」（初めての持ち家）が与えられ、主の御名を褒め称えておりました。ようやく広い会堂となり、設備が整えられ、「これからの成長にピッタリだ」と思い、教会家族全員が再スタートを切りました。しかし、半年もしないうちにコロナ感染症による恐怖が全国また全世界的に人々の心を包みました。「かつて見たことのないウィルス」と高度な安全対策が要求され、世界中の人々は家を出られず、信仰の有無とは関係なく、多くの方が孤立してしまいました。「三つの密」を避ける生活が強いられる中、様々な疑問が襲ってくる日々を過ごしました。「交わりを欠かすと一人一人の信仰生活はどうなるのだろうか？」「教会の運営や財政は崩れないだろうか？」「折角の広い会堂は無駄にならないだろうか？」「人との繋がりが妨げられる中、どのようにして福音の知らせを世の果てまで届けられるだろうか？」

そのような中、以前からビジョンがあった集会の「ライブストリーミング」を実行しようと思い、数人の教会員が骨折って設備の導入と質の向上に努めてくださいました。一度も礼拝を休むことなく、この新しい奉仕が始められ、福音宣教のための新たな道具となりました。コロナ禍を抜ける最中にある今も大いに用いられております。

平日の集会や活動を一時的に中断せざるを得なく、交わりや伝道に関する工夫が次の課題となりました。ビデオ会議等の技術を用いることにより、ある程度交わりのギャップを埋める手段が設けられ、何とかお互いの間の絆を保つことができました。また、学び会や会議も、参加者の移動時間を節約する事により、以前なら不可能であった時間帯での実施が可能になりました。さらに、宣教師の立場からすると、フアーローに出かけられずにいましたがビデオ会議を用いることにより、多額の移動費を出費することなく、サポート教会との連携をとることもできるようになりました。

今でも講壇に透明パーティションを
設置したまま

また、教会生活のリズムが以前とは異なっていたため、教会のホームページを充実させ、教会の宣伝手段に磨きをかける時間が与えられました。ＹｏｕＴｕｂｅに残るメッセージ動画、ホームページの充実、新設のインスタグラムなどの利便性の向上により、教会が広く知られ、問い合わせが増えていきました。それぞれの働きが促す新しい出会いが伝道の機会を生み出し、福音を語るチャンスが続々と与えられたのです。孤独で悩む人々が、希望を求め、助けを求める新たなパラダイムがこのコロナ禍の結果の一つだと考えさせられます。

各集会の復帰のタイミング、マスク着用規定の緩み、食事会休止の解除、聖歌隊練習の再開など、一つ一つを真剣に祈り、決断する中、気付かされることも多々ありました。教会の「ファミリー性」を促す交わりが一度無くなると、どれだけ大切なものかと改めて気付かされること。兄姉が現地の礼拝に戻る際の、新しい出会いと教会の成長を共に祝う喜び。新しいパラダイムの中を通り、以前から存在していた習慣や必要に迫られて始めた活動などがこれからの新時代の中でどのように調和できるのかという課題について、毎日、主の知恵を切に求める必要があること、などです。

2022年のクリスマス･カンタータの参加者
「コロナ後」の最初の伝道集会